

1ドル87セント。それがすべてでした。月8ドルの家具付きの安アパートに住むテラにはすべてを切りつめてためていても、それだけしかありませんでした。明日はクリスマスなのに……。愛する夫ジムへのプレゼントを買うためのお金が、わずか1ドル87セントしかなかったのです。テラは、ソファーに倒れ込み、泣くだけ泣きました。その後、窓ぎわに立ちながら、ジムのために、何かすばらしいもの、めったにお目にかかれないような、本当の値打ちのあるもの、何か少しでもジムの持ち物となるものにふさわしいものを、あれこれと考えましたが、1ドル87セントではどうにもなりませんでした。

それはそうと、ジムとテラ夫婦には、2つの自慢の品がありました。1つは、ジムの金時計で祖父から父へと代々伝わってきた物でした。どこかの国の王さまでもほしくて歯ぎしりをするような立派な金時計でした。もう1つは、テラの髪の毛でした。その髪はとても美しくどこかの国の女王さまの宝石や首飾り以上に美しい物でした。ふと、テラは鏡の前に立ち、自分の美しく長い栗色の髪をみましました。それから、いらだたしげに手早く髪をゆい上げました。一瞬ひるんだように立ちつくし、ボロボロの赤いじゅうたんの上にぼたぼた涙をこぼしました。まだ、目に光るものを残しながら、テラは古ぼけた栗色のコートと古ぼけた栗色の帽子をかぶると、ドアを出てアパートの階段をかけ下り、町へ出て行ったのです。

行き着いた場所は、「マダム・ソフィローー 髪用品」でした。

(*当時は、上流階級にカツラが流行し、髪の毛が高値で取引されていた)

「私の髪を買っていただけますか。」とテラはたずねました。「帽子を取って、ちょっと拝見。」「20ドルだね。」「マダムは、慣れた手つきで髪を持ち上げながら言いました。

髪を売ってテラは、2時間の間ジムにふさわしいプレゼントを求めて町の店という店を探し求めました。そして、ついにプレゼントを見つけたのです。それは、ブラチナの時計用の鎖(くさり)で、簡素で高貴なデザインがほどこされたものでした。ごてごてした派手な飾りはありませんが、それゆえに気品に満ちたものでした。これこそジムのものだと直感しました。ひかえめで、品があるさまは、ジムそのものようでした。値段は21ドルでした。のこりの87セントをふところに入れ、テラは帰りました。帰り着いたテラは、夕食の準備をしながらジムの喜び顔を思い浮かべました。ジムの喜び顔と、大事な髪を売ってしまった後悔が入り交じった不思議な感情を抱きながら、夕食の準備をてきばぎと仕上げました。



ジムは、定刻通りに仕事から帰ってきました。テラは、「神さま、あのひとにいまでも、あたしを美しいと思わせてやって下さい。」と心の中で叫びました。ドアが開き、ジムが入ってきました。部屋へ入ってきたジムは、テラを見てぼう然と立ちつくしました。怒りでも、驚きでも、不満でも、恐怖でもない、テラの予想していたどんな感情とも違っていました。テラは、ジムに寄りそい、「あたし髪を切って、売っちゃったの。クリスマス・プレゼント無しでは、しのびなかつたの。また、すぐに伸びるわ。気にしないで、メリークリスマスといって。」といいました。ジムは、ふぬけみだいな顔で室内を見わたしながら、「髪、なくなってしまうんだね。」といいました。「探してもむだよ。売ったの、いいこと、売るとばしっちゃったのよ。さあ、クリスマスイブよ、お肉を暖めるわね、ジム」

ジムは我に返ると、テラを抱きしめました。そして、オーバーのポケットから小さな包みを取り出し、机の上に置きました。「見ることなんては困るよ、テラ。髪を切るうが、顔をそろうが、髪を染めようが、そんなことで君に愛想をつかす僕じゃない。ただ、その包みを開けたら、ほくがどうしてはじめとまどっていたか、わかるはずさ。」テラの白い指が素早く動いて、紙をとりぞきました。それから思わす歓声もれ、次の瞬間には大きな声で泣き出していました。

箱の中には、2本のクシが入っていたのです。テラがずっとほしがっていた、ベッ甲細工で周りに宝石をちりばめた美しいものでした。テラの美しい栗色の髪にぴったりのものでした。値段がすごく高いものだったので、まさか手に入るはずないあがれのものだったのです。テラはやっとの思いで、顔を上げると、うるんだ目でほほえんで見せました。そして、あっと思い出したように、自分が用意したプレゼントを手のひらにのせ、いそいそと彼にさし出しました。

「ね、しゃれているでしょう、ジム。これならあなたの時計も引き立つわ。さ、時計をかって、ぶら下げたところが見たいわ。」うなずくかわりにジムは、ソファーにすわり手を頭の後ろに回してほほえんだのです。

「テラ、おたがいクリスマスプレゼントはかたつけて、しばらくそっとしておこう。今すぐ使うにはもったいなさすぎる。じつは、クシをかうお金をつくるために、時計を売ってしまったんだ。さ、肉料理にとりかかってくれよ。」



ごぞんじのとおり、まぶね（馬のおけ）の中の幼な子イエスにおくりものをもたらした東方の三賢者は、かしこい人でした。すばらしくかしこい人でした。クリスマス・プレゼントの風習はここに始まったのです。かしこい人々のことです。その贈り物もすばらしいものであったに違いありません。おそろく、返品してもいい特典もあったかもしれません。

それにひきかえ、ここで私が紹介した人々は、アパート住まいの、二人のおろかな人の子の、何の変哲もないエピソードです。お互いのために、我が家の何よりの宝を犠牲にしまった、愚か者の頂点に立つ人々です。

だが、最後に現代の賢い人々にひとこと言わせていただくとすれば、この二人こそが最もかしこかったのです。贈りもののやりとりをする人々のうち、彼らみたいな人々が最高です。どこに住んでいようが、かしこさにはかわりありません。彼らこそ賢者なのです。

